



此經乃事よあり

あり乃川下まきり

在ま釋善ち(は)

此わん兼日のこ

みまの院

中國白殿の家也

おのも南れ院り

おります比あの對

よ殿のかります

モ  
蒙の勝記

経行まどし

かみまどしあわす

らりのらありがけ

明日を第一乃時

髪をげりつる

まあり

此經乃こまよありわしせあり

此がかりかまよ

まさんとしてこまひかりあり

乃院の小がよまきりのまきよれ

まきまどしよ大をともしてあり

おのも南れ院

まきまどしありけりまきまどし

まきまどしありけりまきまどし

まきまどしありけりまきまどし

まきまどしありけりまきまどし

まきまどしありけりまきまどし

女房のきぬ

まきまどしありけりまきまどし

まきまどしありけりまきまどし

まきまどしありけりまきまどし

まきまどしありけりまきまどし

まきまどしありけりまきまどし

まきまどしありけりまきまどし

まきまどしありけりまきまどし



車の上より 伊用と陸家  
乃すれあがぐのせよ  
西のこゝ

これといふれども  
おくりまへおかしき  
せす。いふはくし  
ふれしとて車の比  
まじりしとて

女院と 女院と  
三条院 注よ 一巻院の  
母なり

後車にありし十  
女院の後車とて  
その心しそ女院  
後車乃教をいふ也  
よりの尾車 彼十  
の内四ハ尾車をの車  
とあり  
すし今乃けさきぬ  
尼もひりハ尾絶乃  
きぬまをいふ  
この女房乃十 彼十  
の内し第一乃女院の  
車次ハ尾車 四乃  
ハ女房の車十合し  
十ハしそをいふ車  
りすふとあり  
かひのりし衣 桃  
下しし衣表あり

まのりし衣とて  
てとては車乃  
げとては車乃

まのりし衣とて  
てとては車乃

まのりし衣とて  
てとては車乃

まのりし衣とて  
てとては車乃

まのりし衣とて  
てとては車乃

まのりし衣とて  
てとては車乃

まのりし衣とて  
てとては車乃

まのりし衣とて  
てとては車乃

まのりし衣とて  
てとては車乃

まのりし衣とて  
てとては車乃

まのりし衣とて  
てとては車乃

まのりし衣とて  
てとては車乃

まのりし衣とて  
てとては車乃

まのりし衣とて  
てとては車乃

まのりし衣とて  
てとては車乃

まのりし衣とて  
てとては車乃

まのりし衣とて  
てとては車乃

まのりし衣とて  
てとては車乃

まのりし衣とて  
てとては車乃

いひこころ

アラスカ 青未濃裳 裾帯 領巾や采女のまきこ

えひくちりりちねれと  
蒲田保織物指費。  
采女をふりてし  
あふぐいむい女  
肩としふのり時ハ  
走嬪平繪乃指費  
又掌侍命婦と強袴  
乃上ト平繪の指費  
男のこくまき馬よ  
のりく成襖の章  
供のこくまき一糸の  
禪岡乃秘訣あり

しらのけき  
けらのまきあ  
りまきこころいあぞ

かすみわ... 女房のらうらうくろ白ひ

あひく... 女房のらうらうくろ白ひ

あどより... 女房のらうらうくろ白ひ

あざりあ... 女房のらうらうくろ白ひ

あま... 女房のらうらうくろ白ひ

らうらう... 女房のらうらうくろ白ひ

車... 女房のらうらうくろ白ひ

あゆん... 女房のらうらうくろ白ひ

あま... 女房のらうらうくろ白ひ

あま... 女房のらうらうくろ白ひ

あま... 女房のらうらうくろ白ひ

あま... 女房のらうらうくろ白ひ

あま... 女房のらうらうくろ白ひ

あま... 女房のらうらうくろ白ひ

あま... 女房のらうらうくろ白ひ

あま... 女房のらうらうくろ白ひ

あま... 女房のらうらうくろ白ひ

あま... 女房のらうらうくろ白ひ

あま... 女房のらうらうくろ白ひ

あま... 女房のらうらうくろ白ひ

あま... 女房のらうらうくろ白ひ

あま... 女房のらうらうくろ白ひ

あま... 女房のらうらうくろ白ひ

ささきのちらぬまのり  
らん入ん  
髪のはらしてあてつけ  
―毛もさうけんねむ  
悪き髪をけむるそと  
ふかきまんとせん  
と  
車うちらぬ  
女房の車―せうし牛  
とやとめし堀つゝ  
をかりしとせむら  
とふにけりけり  
作つてあんとす  
と

このころののぐりて  
樂子高麗の系唐の  
ふとてあり松葉  
あ

のちよのちあ―らん人とかんはべし  
あゝあ―らうづらう。程いくのめらねあ  
よあれはふまうとんと我々どか  
ふあがゆゑはこゝとせまやれ。車  
らもちだも入るあひのあひかり―ち  
つゝ―とせむらけこ―ら―りきり  
はびきこゝとららめぞよ真あるま  
さあ―らう―ら―ら―ら―ら―ら  
のの―と―と―と―ら―ら―ら―ら―ら  
子こゆ大がどりまひさうのきつ―なり  
とま―物とかが―とこ―ら―ら―ら―ら  
度まあどよま―と―と―と―と―と

のりつゝあぶ  
はまふ車せ―と  
とれるあり

このくらあめ  
あやり晴し―と  
のりつゝあぶ

ひまきののりやうにかなゆ。肉は入れがら  
りらり降りあがらむ。そとてあまて  
かけ―ら―。いせんあひの―ら―ら―ら  
て―と―と―と―と―と。かえの―は―ら―ら  
よせ―と―と―と―と。伊用と隆家  
と―と―と―と。まひ―と―と  
今す―ありあけせうあ。大細と放  
と―と―と―と。は―と―と  
まり―と―と。車―と―と  
あが―と―と。まひ―と―と  
と―と―と―と。あ―と―と  
と―と―と―と。あ―と―と



これハ初の大吏也

勘物御堂 乃云云

これハ初の大吏也  
乃云云

院の御供也

女院の御供也

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云

乃云云





け中かいたまう上  
近來陣を引く禁  
中かいたまう上  
綯をつりては  
俄にやまう人  
は服うかんと  
まに法信那の  
のゆうと信が  
は信那とあま  
信那のゆうと  
信那のゆうと  
信那のゆうと

いさめと隆安の女房  
乃すすいられし  
隆安のゆうと  
お梅のゆうと表紅  
ひな

大初る守師より  
法今のゆうと  
乃あり守師より  
てまは守師より

國自初法信那の法服  
お梅はさあつりし  
をさうわりし  
切調  
乃物をさりし  
又わしひぬ大納を教す  
きうもひくせい  
のまひし  
乃信那乃君あつりし  
案乃けさ  
ぬささし  
よま  
乃中かいたまう上

えぐ  
納を教す  
梅乃ありぬ  
お梅乃ありぬ  
何のゆうと  
い  
乃花れありぬ  
上連が殿上人  
い  
きり  
は同じ



流心からか 相義のり  
九條錫杖 不空三藏の  
作一まわりを聲明  
えくせをけり聲明  
よす事し。湯杖の志をまけり。一切衆生菩提心をか。諸佛とこれを  
おし成佛す。す。一切位す。ことなりをのぞけり。

念佛の廻向 光明遍照十方世界念佛衆生掃取不捨 觀經の廻向の志  
志心尺云廻所作業趣向於彼謂之廻向

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也

舟と 舟の廻向也  
舟と 舟の廻向也



たつがね 下駄

下駄 原下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

あつがね 下駄

一、二社  
茅白八幡三所 蘇和天皇  
神功皇后 玉依姬 貞觀元  
年九月十九日 行教和尙  
於男山 築建 中下等  
大原野 云昔年云未詳  
三年 雨院 在 卷 九 嗣  
わの 氏 神 云 目 を 勸 法 師

これよりわの二社次第あり  
此の二社 茅白八幡 三所 蘇和天皇  
神功皇后 玉依姬 貞觀元  
年九月十九日 行教和尙  
於男山 築建 中下等  
大原野 云昔年云未詳  
三年 雨院 在 卷 九 嗣  
わの 氏 神 云 目 を 勸 法 師  
茅白八幡三所 蘇和天皇  
神功皇后 玉依姬 貞觀元  
年九月十九日 行教和尙  
於男山 築建 中下等  
大原野 云昔年云未詳  
三年 雨院 在 卷 九 嗣  
わの 氏 神 云 目 を 勸 法 師  
茅白八幡三所 蘇和天皇  
神功皇后 玉依姬 貞觀元  
年九月十九日 行教和尙  
於男山 築建 中下等  
大原野 云昔年云未詳  
三年 雨院 在 卷 九 嗣  
わの 氏 神 云 目 を 勸 法 師

伊弉諾 八重 河内  
みかろ 伊弉 八重 河内  
五葉 伊弉 八重 河内  
みかろ 伊弉 八重 河内  
五葉 伊弉 八重 河内  
みかろ 伊弉 八重 河内  
五葉 伊弉 八重 河内  
みかろ 伊弉 八重 河内  
五葉 伊弉 八重 河内  
みかろ 伊弉 八重 河内  
五葉 伊弉 八重 河内

伊弉 八重 河内  
みかろ 伊弉 八重 河内  
五葉 伊弉 八重 河内  
みかろ 伊弉 八重 河内  
五葉 伊弉 八重 河内  
みかろ 伊弉 八重 河内  
五葉 伊弉 八重 河内  
みかろ 伊弉 八重 河内  
五葉 伊弉 八重 河内  
みかろ 伊弉 八重 河内  
五葉 伊弉 八重 河内





Handwritten text in the top section of the right page, consisting of approximately 15 lines of cursive script.

Handwritten text in the bottom section of the right page, consisting of approximately 15 lines of cursive script.

Handwritten text in the top section of the left page, consisting of approximately 10 lines of cursive script.

Handwritten text in the bottom section of the left page, consisting of approximately 10 lines of cursive script.

Handwritten text in the top section of the left page, consisting of approximately 10 lines of cursive script.

Handwritten text in the bottom section of the left page, consisting of approximately 10 lines of cursive script.

Handwritten text in Arabic script, likely a list or a short treatise, located in the upper right section of the page.

Handwritten text in Arabic script, continuing the list or treatise, located in the middle right section of the page.

Handwritten text in Arabic script, located in the lower right section of the page.

Handwritten text in Arabic script, located in the middle left section of the page.

Handwritten text in Arabic script, located in the lower left section of the page.

Handwritten text in Arabic script, located in the bottom left section of the page.

Main body of handwritten text in Arabic script, occupying the right half of the page.

Main body of handwritten text in Arabic script, occupying the left half of the page.

肩方高きもの百重  
巾着もよしとあらば  
世を渡るもよし  
世を渡るもよし

白のちりぢりぢりぢりぢり  
入りし十日十日  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた

朗詠三五廿中訂  
月三二百里外在  
心又誰人離分久延  
成何處庭前影別離  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた



よきことしのわざと  
かきかきかきかきかき  
かくかくかくかくかく  
かくかくかくかくかく  
かくかくかくかくかく  
かくかくかくかくかく  
かくかくかくかくかく  
かくかくかくかくかく  
かくかくかくかくかく

あつたつあつたつあつたつ  
あつたつあつたつあつたつ  
あつたつあつたつあつたつ  
あつたつあつたつあつたつ  
あつたつあつたつあつたつ

さむらいあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

あつたつあつたつあつたつ

うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ

きくくくくく  
威儀正しく  
いあま  
大将の  
大将の

うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ  
うしんくわんじつ

孔在經乃法後經  
孔在明王乃法也  
指要録四孔在經三  
卷安底比丘地較足  
痛阿難白佛乃說大  
孔在神咒往救由是  
彌勒諸天諸竜等  
安樂所求遂願如前  
廣說乃至自身及諸  
眷屬壽命百年笑  
孔在乃法のこ  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法

浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法  
浄修法

浄修法

浄修法



こと人乃まき炭丸

てか

心もあまか入乃大

桶の清くあるはふ

めごと炭をてつと

ねまきしとが火桶

のほまれいあしねを

あめめしとやそ心

木の知とえゆ

れいあしとれいし

てか

心もあまか入乃大

桶の清くあるはふ

めごと炭をてつと

ねまきしとが火桶

のほまれいあしねを

あめめしとやそ心

木の知とえゆ

れいあしとれいし

てか

心もあまか入乃大

桶の清くあるはふ

めごと炭をてつと

ねまきしとが火桶

のほまれいあしねを

あめめしとやそ心

木の知とえゆ

れいあしとれいし

てか

心もあまか入乃大

桶の清くあるはふ

めごと炭をてつと

ねまきしとが火桶

のほまれいあしねを

あめめしとやそ心

三十一

からぬばしをさしとてし

火かけ川よきしとてし

くらふしとてしとてし

とい乃あるよりあしとてし

うれいれぬしとてし

ちとすわぬしとてし

てか

心もあまか入乃大

桶の清くあるはふ

めごと炭をてつと

ねまきしとが火桶

のほまれいあしねを

あめめしとやそ心

木の知とえゆ

れいあしとれいし

てか

心もあまか入乃大

桶の清くあるはふ

めごと炭をてつと

ねまきしとが火桶

のほまれいあしねを

あめめしとやそ心

木の知とえゆ

れいあしとれいし

てか

心もあまか入乃大

桶の清くあるはふ

めごと炭をてつと

ねまきしとが火桶

のほまれいあしねを

あめめしとやそ心

三十二



彼輩此物をこれ  
 て立走りていふも志  
 おりし。いふには淡路  
 也。俣氏杜程をいふ  
 えをといふけとある  
 ぐいしな〜  
 じん従者し〜  
 おりてし〜  
 常れ居てを  
 ぬらう〜  
 余雅云楊蒲柳也詩  
 義疏云蒲柳之木二種  
 一種皮正青一種皮紅  
 正白華皆長廣似柳  
 可爲筥削奇。廣志曰  
 楊一名高皮木葉火  
 於柳也

けいすまをいふ〜  
 まのれい〜  
 じん〜  
 けいりん〜  
 三月〜  
 人乃家〜  
 ち〜  
 や〜  
 う〜  
 めり〜  
 さ〜  
 昔〜

さ〜  
 同族〜  
 志を〜  
 のも〜  
 たり〜  
 お〜  
 さ〜  
 い〜  
 集の〜  
 時皇〜  
 始め〜  
 三〜  
 二〜  
 ま〜  
 何〜  
 一〜

こ〜  
 ち〜  
 ふ〜  
 と〜  
 一〜  
 る〜  
 い〜  
 今〜  
 一〜  
 る〜  
 今〜  
 一〜  
 一〜  
 る〜  
 い〜  
 今〜  
 一〜  
 る〜  
 い〜

集巻三

集巻三

は松遊三ふくしあひ  
ちよせをらふまふり  
てまらひあふまふり  
ーりりりり

けいせんふくしあひねえ  
我もあふまふり  
とてあふまふり  
ら臆しこれよあふ  
やのうらまふり

馬がのさひきいね  
やうと申あひね  
まのあふまふり  
里居一作あふまふり  
やうと申あふまふり  
くめいあふまふり

こしあふまふり  
こしあふまふり  
百あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり

清あふまふり  
我あふまふり  
山あふまふり  
寺あふまふり  
あふまふり  
あふまふり

あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり

あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり

あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり

あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり

作せしあふまふり  
これあふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり

あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり

あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり

あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり

あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり

あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり

あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり

あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり

あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり  
あふまふり

独居の退出の事  
江次身十(御佛名の  
道守師)赤大法師類  
二則至  
子一則

此の月の夜は雪  
霞乃屋の足が  
又あききぬ  
月不映(る)録  
す片(も)あ

下すれもけぬ  
車乃屋の下にす  
乃すね(る)る  
下すれもけぬ  
うすき 枕葉業あり  
向(き) 表お梅表蕪  
芳(き)

山吹 せやも  
へー 枕花流  
山吹 せやも  
へー 枕花流  
山吹 せやも  
へー 枕花流

和名 軒 説文云 軒車前也

さぬらんりー 里へも出さぬ  
お西(の)も 花のりへ出さぬ  
男(の)同車(の)も 花のりへ出さぬ  
のりへ出さぬ 花のりへ出さぬ  
降つる雪乃けさる  
さぬらんりー 里へも出さぬ  
お西(の)も 花のりへ出さぬ  
男(の)同車(の)も 花のりへ出さぬ  
のりへ出さぬ 花のりへ出さぬ

さぬらんりー 里へも出さぬ  
お西(の)も 花のりへ出さぬ  
男(の)同車(の)も 花のりへ出さぬ  
のりへ出さぬ 花のりへ出さぬ  
降つる雪乃けさる  
さぬらんりー 里へも出さぬ  
お西(の)も 花のりへ出さぬ  
男(の)同車(の)も 花のりへ出さぬ  
のりへ出さぬ 花のりへ出さぬ







あつきのきりぎりすに  
朗詠三世の中をいり  
いそんぬがけけい  
ゆく舟の海のちりり  
捨遺集のちりり  
万葉集のちりり  
舟の海

あつきのきりぎりすに  
和名云泉即漢人  
海人潜女とあつ  
あつきのきりぎりすに  
いそんぬがけけい  
ゆく舟の海のちりり  
捨遺集のちりり  
万葉集のちりり  
舟の海

あつきのきりぎりすに  
朗詠三世の中をいり  
いそんぬがけけい  
ゆく舟の海のちりり  
捨遺集のちりり  
万葉集のちりり  
舟の海

あつきのきりぎりすに  
朗詠三世の中をいり  
いそんぬがけけい  
ゆく舟の海のちりり  
捨遺集のちりり  
万葉集のちりり  
舟の海

あつきのきりぎりすに  
朗詠三世の中をいり  
いそんぬがけけい  
ゆく舟の海のちりり  
捨遺集のちりり  
万葉集のちりり  
舟の海









朗詠曉乃部朗詠乃部  
 佳人盡飾於晨粧佳人盡飾於晨粧  
 魏宮鐘動遊子獨魏宮鐘動遊子獨  
 行於殘月函谷鷄行於殘月函谷鷄  
 鳴鳴此賈嶋此賈嶋曉乃曉乃  
 賦乃句賦乃句

後叙の君れゆりのの  
 乳母の名さくことい  
 人と。ごもにはた少と成  
 匪殿乃れ居よまじ  
 こと乳母の名をさく  
 ことなバーや。ほ氏の  
 蓬せれまの乳母を  
 ことさくことい

寄居虫 ちいれさ貝の  
 中にやわりすむ虫也  
 長明方丈託長明方丈託  
 ちいれさ貝をさく  
 ことさくことい

みるくこととやと  
 びま乃れ徳信練つと  
 ことさくことい

是亦信月の吟  
 まるにゆりあをのちりり月よんけ

ひとぶんとまると又いづうやぞいし  
信月のあつと伊月あつと  
 かやうのるりやせいよとてわひいし  
かやうのるりやせいよとてわひいし  
 まこといづうやれいとちりりきめをい

信那乃君れゆりののさうとくくけ  
信那乃君れゆりののさうとくくけ  
 どののけおなわなれはちのいあ  
どののけおなわなれはちのいあ  
 板ぎまのをもちりりよわさて  
板ぎまのをもちりりよわさて

い月をえさあついつるい月をえさあついつる  
い月をえさあついつる  
 乃々まあついつる乃々まあついつる  
乃々まあついつる  
 おりりあついつるおりりあついつる  
おりりあついつる  
 きいあついつるきいあついつる  
きいあついつる

月こるんがうされやうま入乃家まきり  
月こるんがうされやうま入乃家まきり  
 をさういれくあんさうねむつと  
をさういれくあんさうねむつと  
 乃々まあついつる乃々まあついつる  
乃々まあついつる  
 まう下まうねむ也まう下まうねむ也  
まう下まうねむ也  
 ちいれさ貝をさくちいれさ貝をさく  
ちいれさ貝をさく

ちいれさ貝をさくちいれさ貝をさく  
ちいれさ貝をさく  
 ちいれさ貝をさくちいれさ貝をさく  
ちいれさ貝をさく  
 ちいれさ貝をさくちいれさ貝をさく  
ちいれさ貝をさく

ちいれさ貝をさくちいれさ貝をさく  
ちいれさ貝をさく  
 ちいれさ貝をさくちいれさ貝をさく  
ちいれさ貝をさく  
 ちいれさ貝をさくちいれさ貝をさく  
ちいれさ貝をさく

ちいれさ貝をさくちいれさ貝をさく  
ちいれさ貝をさく  
 ちいれさ貝をさくちいれさ貝をさく  
ちいれさ貝をさく  
 ちいれさ貝をさくちいれさ貝をさく  
ちいれさ貝をさく

ちいれさ貝をさくちいれさ貝をさく  
ちいれさ貝をさく  
 ちいれさ貝をさくちいれさ貝をさく  
ちいれさ貝をさく  
 ちいれさ貝をさくちいれさ貝をさく  
ちいれさ貝をさく

ふらりいふ人乃家の  
けいりい  
こにいふ女房乃  
ま方だ家やまらと  
とあつてをきとせ  
ら  
けいりあつてふら  
いふ男乃  
ま方だ家やまらと  
とあつてをきとせ

里小いふ人乃家の  
けいりい  
こにいふ女房乃  
ま方だ家やまらと  
とあつてをきとせ  
ら  
けいりあつてふら  
いふ男乃  
ま方だ家やまらと  
とあつてをきとせ

いふ人乃家の  
けいりい  
こにいふ女房乃  
ま方だ家やまらと  
とあつてをきとせ  
ら  
けいりあつてふら  
いふ男乃  
ま方だ家やまらと  
とあつてをきとせ

家乃やけいりい  
けいりい  
こにいふ女房乃  
ま方だ家やまらと  
とあつてをきとせ  
ら  
けいりあつてふら  
いふ男乃  
ま方だ家やまらと  
とあつてをきとせ

いふ人乃家の  
けいりい  
こにいふ女房乃  
ま方だ家やまらと  
とあつてをきとせ  
ら  
けいりあつてふら  
いふ男乃  
ま方だ家やまらと  
とあつてをきとせ

いふ人乃家の  
けいりい  
こにいふ女房乃  
ま方だ家やまらと  
とあつてをきとせ  
ら  
けいりあつてふら  
いふ男乃  
ま方だ家やまらと  
とあつてをきとせ







こゝろに  
 乃阿のり  
 ぬり

春野上

幸きひり  
 けの  
 古今村名のま  
 名  
 村名  
 幸  
 乃阿のり

あ  
 経  
 座  
 く

我  
 は  
 を  
 今

う  
 あ  
 り  
 乃阿のり

乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり

乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり

乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり  
 乃阿のり

乃阿のり

乃阿のり







中へいり直る  
親の足元をいひく

四位又位ハキハ位ハ  
四位ハ黒ハ位ハ細乃  
袍ハカマハ位ハ細乃

六位ハ緑衫ハカママ  
似命ハカマ

林中小直ハカマ乃  
乃衣服ハ位ハ

吟味ハ位ハ  
家ハ位ハ

一家ハ位ハ  
乃ハ位ハ

他ハ位ハ  
乃ハ位ハ

一家ハ位ハ  
乃ハ位ハ

一家ハ位ハ  
乃ハ位ハ

一家ハ位ハ  
乃ハ位ハ

一家ハ位ハ  
乃ハ位ハ

一家ハ位ハ  
乃ハ位ハ

一家ハ位ハ  
乃ハ位ハ

すまゝハ位ハ  
乃ハ位ハ

四位又位ハ  
乃ハ位ハ

事ハ位ハ  
乃ハ位ハ

乃ハ位ハ  
乃ハ位ハ

乃ハ位ハ  
乃ハ位ハ

乃ハ位ハ  
乃ハ位ハ

乃ハ位ハ  
乃ハ位ハ

乃ハ位ハ  
乃ハ位ハ

乃ハ位ハ  
乃ハ位ハ

乃ハ位ハ  
乃ハ位ハ

乃ハ位ハ  
乃ハ位ハ

乃ハ位ハ  
乃ハ位ハ

乃ハ位ハ  
乃ハ位ハ

あけいこ女ごの半乃  
やじりの名に名のそれ  
とゆいよりまきぶ  
天をよもあけいね  
天守とハ揚家まの  
流子もをいよこまの  
歴この流子もあけい

打ゆ本ごいぬまの  
名おをぶちぬけり  
やいぬいんをこあ  
いぬいせんを男のよ  
ういぬい  
まの月れありいよ  
拾遺三三も月乃  
まの月れありいよ  
天守とハ揚家まの

あけいこ女ごの半乃  
やじりの名に名のそれ  
とゆいよりまきぶ  
天をよもあけいね  
天守とハ揚家まの  
流子もをいよこまの  
歴この流子もあけい  
あけいこ女ごの半乃  
やじりの名に名のそれ  
とゆいよりまきぶ  
天をよもあけいね  
天守とハ揚家まの  
流子もをいよこまの  
歴この流子もあけい

あけいこ女ごの半乃  
やじりの名に名のそれ  
とゆいよりまきぶ  
天をよもあけいね  
天守とハ揚家まの  
流子もをいよこまの  
歴この流子もあけい  
あけいこ女ごの半乃  
やじりの名に名のそれ  
とゆいよりまきぶ  
天をよもあけいね  
天守とハ揚家まの  
流子もをいよこまの  
歴この流子もあけい

あけいこ女ごの半乃  
やじりの名に名のそれ  
とゆいよりまきぶ  
天をよもあけいね  
天守とハ揚家まの  
流子もをいよこまの  
歴この流子もあけい  
あけいこ女ごの半乃  
やじりの名に名のそれ  
とゆいよりまきぶ  
天をよもあけいね  
天守とハ揚家まの  
流子もをいよこまの  
歴この流子もあけい

わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...

わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...

わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...

わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...  
わがまは...

あまのつらみをうらみまじり  
 直衣ナヨレのたにききぬか  
 こゝろをまじりぬをまね  
 げると直衣ナヨレのたにきき  
 や。一洗指衆と異なり  
 直衣ナヨレのたにききぬか  
 ぼんぎもあまのつらみ  
 人々のまじりぬをまね  
 けると直衣ナヨレのたにきき  
 ぬか。一洗指衆と異なり  
 直衣ナヨレのたにききぬか

仇の男ツキヲよりをとり  
 けると直衣ナヨレのたにきき  
 ぬか。一洗指衆と異なり

せんぎふ おまじり  
 こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね  
 ねのちやまのまじりぬを  
 大徳病オホトクのあひ百怪ヒャクケ競  
 ひ起ヒて鬼神クワンシヤ邪ヤ靡ヒ靡  
 家を耗乱コウランとまじりぬを  
 子コ眼ガン大ダイ徳トク乃ノ係ケれおま  
 じりぬをまじりぬをまね

けふまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね

こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね

こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね

こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね

こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね

こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね

こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね

こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね  
 こゝろをまじりぬをまね

観世言菩薩を令

け陀死を誦して

子満る海に

悉皆消滅せんとわ

細くつやめきこ

とわきしに

とて同らひひ

とてい志を

同らひひ

死月あり

たし決昔に詩も他

とて

催は

を足せ

わ務の

とて

柳の

たて

現は

とて

とて

られ

ひ

童女

た

に

陪

と

と

人

の

の

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

つをかりけく  
とををををををを  
愛すくををををを

むらじききき

か箱わの佛乃二巻也  
持の行者乃二葉信之密  
をば二葉おのりとも  
何の時乃二きききき  
ほらちをきききき  
葉飯をききき

い申れひま  
とををををを  
に実ををを  
よく信で  
はあしきき

ひけひねね  
まうやう  
かよをを  
いをを  
らわ

あをい  
おのり  
ををを  
ををを  
ををを

あをい  
おのり  
ををを  
ををを  
ををを

あをい  
おのり  
ををを  
ををを  
ををを

あをい  
おのり  
ををを  
ををを  
ををを

あをい  
おのり  
ををを  
ををを  
ををを



こつ切... 法師の...  
法師の...  
法師の...

きね 乃せぬ

背縫

のけり... 法師...  
法師...  
法師...

法師... 法師...  
法師...  
法師...

あゝ... 法師...  
法師...  
法師...

あゝ... 法師...

あゝ... 法師...  
法師...  
法師...

あゝ... 法師...  
法師...  
法師...





法少網言枕草子者中古之遺風和語之後烈也  
并羨於家女源氏物語也當困然之者也然未有  
選其義按具部考其辭者惜乎蓋有之未見之  
平自畫字好讀無數志為訓釋故平日覽古集  
每有意會則引奉題書就思傍訊槩宣意或  
遂自出字以成十二卷以春曙抄為名猶有  
類而闕如之者惟物更待後之博洽不強鑿說  
今也流俗為風雅感起幸過以時命之形持  
庶流傳于市井也庶幾復和弄之人做其詞花  
効之風流云尔

延寶二年甲寅七月十七日



山村香以出

法少納言枕草子者中古之遺風和語之後列也  
并羨於家女源氏物語也當園然之者也然亦有  
選其義按其部考其辭者惜乎蓋有之未見之  
而自雲字好讀無教志為訓釋故平日覽古集  
每有意會則引奉題書就思傍訊槩宣意或  
遂自出字以成十二卷以春曙抄為名猶有  
類而闕如之者惟勅更待後之博洽不強駁說  
今也後陸俗為風雅感起幸遇以時命之形持  
庶流傳于市井也庶幾復和弄之人做其詞花  
効其風流云尔

延寶二年甲寅七月十二

*[Handwritten notes and seals]*

